

旧石器時代から縄文時代にかけての狩猟具とその文化

愛知学院大学文学部

白石 浩之

1 狩猟具の種類

旧石器時代の狩猟は大きく分けると罾猟と刺突猟がある。そのうち刺突猟は海獣猟と陸上猟があるが、旧石器時代から縄文時代にかけての狩猟であるならば、陸上動物を対象とした狩猟ということになる。狩猟具は木槍、骨槍、石槍が存在する。ヨーロッパでは約 30 万年前のシャーニンゲン遺跡で 1.5~2.0m の木製の槍が出土している。古くはイギリスのクラクトン遺跡の木槍が知られている。骨槍はハンガリーでオーリニャック期のイスタルスケールホール遺跡等の出土例がある。しかし日本では旧石器時代の木槍や骨槍の明確な例は知られていない。したがって石槍のみが分析対象になる。

2 自然環境

当時の自然環境はグリーンランドの氷床コアの酸素同位対比からみて、日本では約 2.3~1.5 万年前の旧石器時代後半から縄文時代草創期は最終氷期の時期である(第 1 図)。縄文時代草創期は未だ晩氷期であり、ヨーロッパの後期旧石器時代終末から晩期旧石器時代に相当しよう(第 2 図)。当時の気候は高低差が激しく、縄文時代であっても新ドリアス期と呼ばれる最寒冷期にひけをとらない低温も訪れた。それ故日本の植生は針葉樹林を中心として落葉広葉樹林を含む混交林が広がっていたが東北日本は一段と針葉樹林が発達していたのであろう。このような環境の中で動物相としてはナウマンゾウやマンモス、オオツノジカの大型動物は約 2.8 万年前を境に衰退し、中・小形動物が狩猟の対象になってきた。

3 尖頭器の消長

神奈川県の相模野台地では厚く堆積下火山灰の中に十数枚の時代の異なる石器群が文化層として確認されている(第 3 図)。最も古い左右非対称形の素材面を大きく残した木葉形尖頭器が登場するのは第 II 黒色帯上部(約 2.3 万年前⁽¹⁾)で認められる。そして第 I 黒色帯下部層(約 2.0 万年前)で槌状剥離を施した尖頭器、そして第 I 黒色帯上部(約 1.9 万年前)ではナイフ形石器と素材を同じくした寸づまりの木葉形尖頭器が製作されるようになる。そして L1H 層ではナイフ形石器が衰退して中形の両面加工が卓越した木葉形尖頭器、L1H 上部(約 1.8 万年前)では細石器と両面行の木葉形尖頭器が共伴する。そして B0 層(約 1.7 万年前)でも大型の両面加工の木葉形尖頭器が出土し、L1S 層(約 1.6 万年前)でも上部で両面加工の木葉形尖頭器と細石器が出土している。このように約 2.3 万年前から 1.6 万年前にかけての約 7 千年間に木葉形尖頭器が継起していた事実を看過すべきではないであろう。

4 組み合わせ具としての狩猟具の構造研究

尖頭器の研究は岩宿遺跡における相沢忠洋の赤土での発見を契機とする。その後芹沢長介長介によって長野県で喚起され、杉原荘介、麻生優が相次いで発掘調査を行った結果、確実に木葉形尖頭器が旧石器時代の所産となった。そして木葉形尖頭器が片面加工・半両面加工・両面加工といった製作技術へと発展していく見通しが捉えられた。かくて最も古い木葉形尖頭器がどのような過程を経て出現するのかといった点に意が払われ、その遡源形態が切出形石器、ナイフ形石器、角錐状石器といった前代の石器に目が向けられるようになるのである。

かくて尖頭器の研究は主として形態学的な研究を中心として進められてきたが、狩猟具という観点からみた場合、もっと別の見方が捉えられる。第 3 図は主な尖頭具に関連する道具としてみた場合、細石刃が組み合わせ道具であるという認識からみて、単式の狩猟具と複式の組み合わせによる狩猟具の二者よりなる。例えば第 II 黒色帯上部(B2U)では切出形二側縁加工のナイフ形石器と角錐状石器、そして左右非対称形の木葉形尖頭器などが見られるが、角錐状石器ないし木葉形尖頭器を木柄の先端部に装着して使用した単式のやり、木柄の先端部にはめこんだ尖頭具に木柄の側縁に切出形二側縁加工のナイフ形石器をはめ込んで使用した組み合わせ具としての

複式のヤリがあり、それが発展して細石器として用いられたものであろう。

5 尖頭器石器群の居住・石材環境

尖頭器石器群は約 2.0 万年前に神奈川県相模原市田名向原No.4 地点で径約 10m の住居状遺構が検出された。住居の域は外周円礫で囲まれ、域内中央には 2 箇所の焼土炉、その炉を大きく囲むようにして柱穴が 10 数カ所確認された。住居内から 2900 点を超える石器が出土し、とりわけ尖頭器は 193 点が出土し、多くが黒曜石製であった(第 4 図)。また該期は神奈川県西部ないし愛鷹山麓にかけて炉跡が多く認められている。約 1.6 万年前の東京都前田耕地遺跡では多摩川支流の秋川と平井川に挟まれた低位面に 2 軒の住居址がよりそうように検出された。一軒は 8 個の人頭大の川原石を円弧状に配列させて住居域を造りだしている。径約 3.3m、もう一軒は約 3m 離れて長径約 4.2m×短径約 3.1m の不正円形の竪穴住居址で、炉が形成されている。住居内から焼けた礫や無文土器、そしてサケの顎歯が 7,200 点と細身の尖頭器が数多く出土した(第 6 図)。

これらの尖頭器の石材は田名向原No.4 遺跡が中部高地の麦草峠産を中心に和田峠産、伊豆箱根産、栃木県の高原山産など中部との関係を含めながらも関東地方の黒曜石原産地から黒曜石を補給していることがわかる。前田耕地遺跡ではチャート、ホルンフェルス、凝灰岩が在地の豊富な石材を持ち込み、頁岩や安山岩は剥片素材を落ち込んでいるらしい(東京都立埋蔵文化財調査センター-1992)。また千葉県六通神社南遺跡では藁科哲男氏の分析で岐阜県下呂石産と奈良県二上山産の尖頭器が複数出土している(藁科 2003)(第 5 図)。200km 以上離れた遠隔地石材を用いて尖頭器を製作していることから、器種と石材との関係はわれわれが想像する以上に強い結びつきがあろう。それ故湯ヶ峰山麓の原産地遺跡である大林遺跡(井上・小嶋・吉朝 2001、吉田 2002)との関連が想起されるところである。また湯ヶ峰との距離は 70km に満たないが、長野県伊那市神子柴遺跡から出土した 25cm を越える大形の尖頭器は下呂石製であったことも前述の点を考える上で看過できない例であろう(藤沢・林 1961、林・上伊那考古学会 2008)。

6 移動生活から半定住化へ

木葉形尖頭器が出現し、発達していく過程では明瞭な住居址や炉址が各地域で散見され、前代の様相と大きく異なってくる。このことは

①遠隔地や在地石材の調達に見通しがついたこと。②約 20,000 年前の住居址は家族単位のものというより、集落成員の共同作業小屋的なもの。③周期的に繰り返される河川漁撈のための一定期間の定住化が考えられる。

註

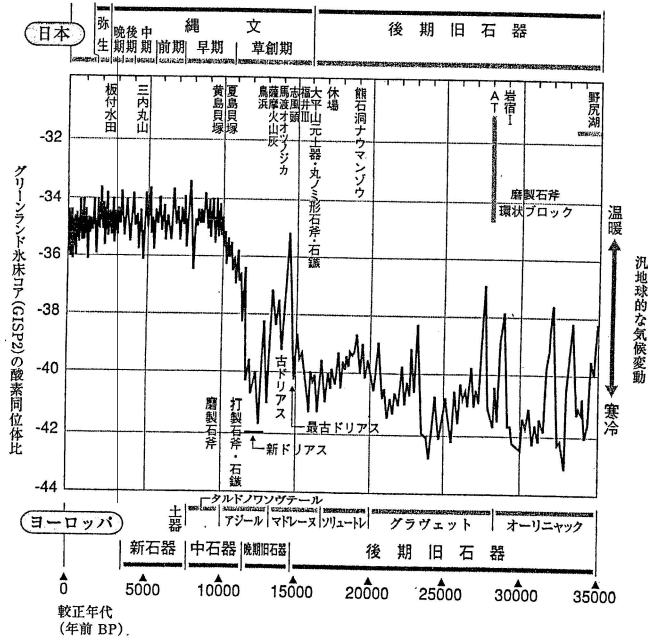
(1) 旧石器時代の年代は暦年代で表示している。ただし今後の年代測定の資料を増加することにより、より精緻な実年代になるであろう。

引用文献

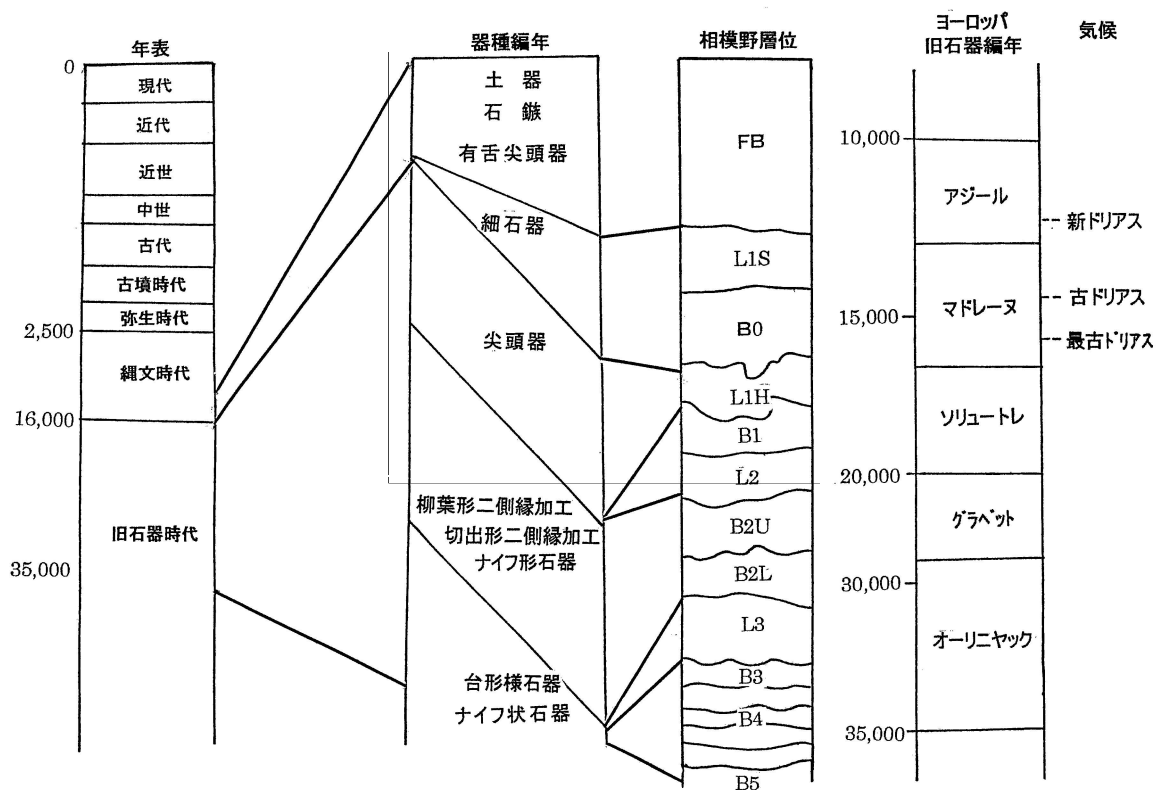
- 井上善六・小嶋準一・吉朝則富 2001 「飛騨の・湯ヶ峰山麓の尖頭器資料」『飛騨と考古学』II
白石浩之 2002 『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1 山川出版社
東京都立埋蔵文化財調査センター・(財)東京都埋蔵文化財センター1992 『縄文誕生』
戸田哲也・麻生順司 2003 『田名向原遺跡 I』相模原市埋蔵文化財調査報告 30
春成秀爾 2001 「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』40-6
林茂樹・上伊那考古学会 2008 『神子柴』
藤沢宗平・林茂樹 1961 「神子柴遺跡」『古代学』9-3
吉田英敏 2002 『大林遺跡の試掘調査報告書』
藁科哲男 2003 「附章 六通神社南遺跡出土安山岩製石器の原産地分析」『千葉東南部ニュータウン二六一六通神社南遺跡一』千葉県文化財センター調査報告 443

(愛知学院大学文学部歴史学科)

hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp



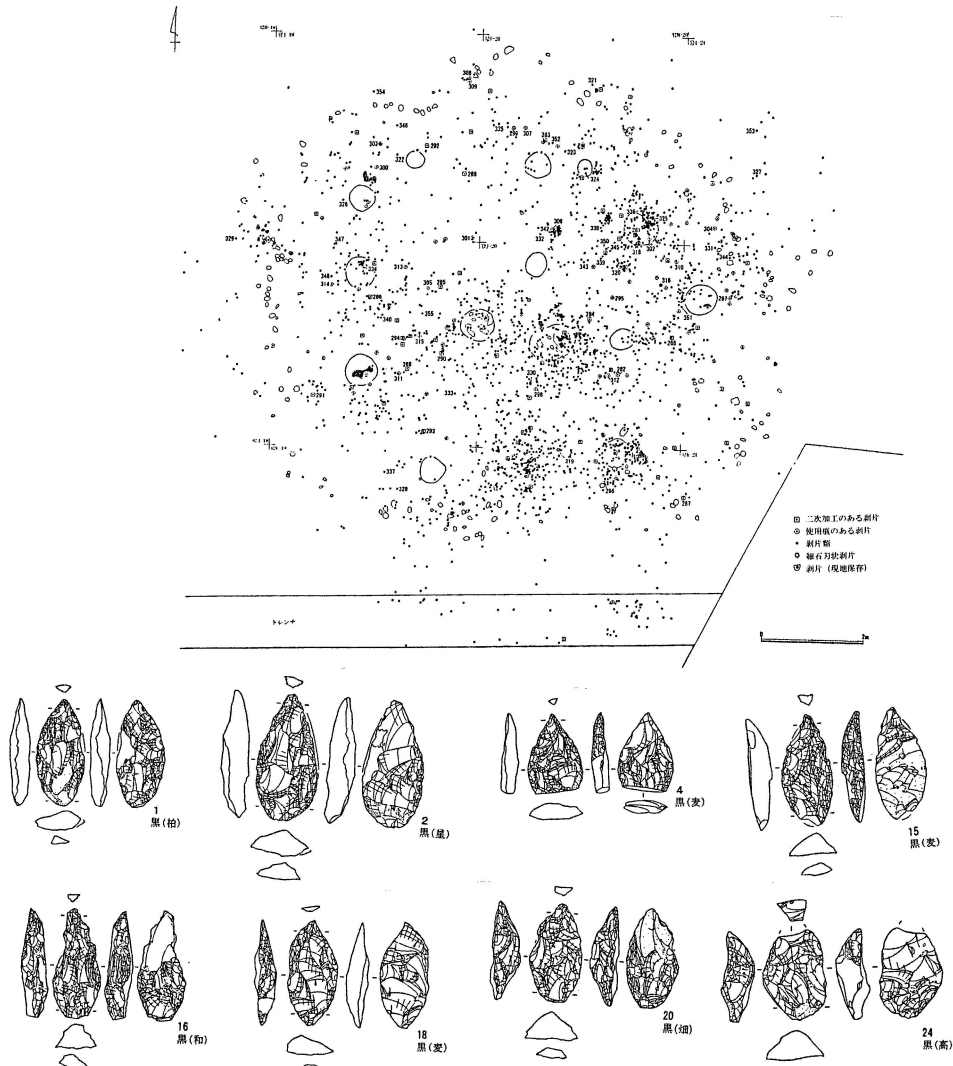
第1図 グリーンランド氷床コアの酸素同位対比からみた気候の変化 (Stiver, M 他 1998 を春成 2001 改変より)



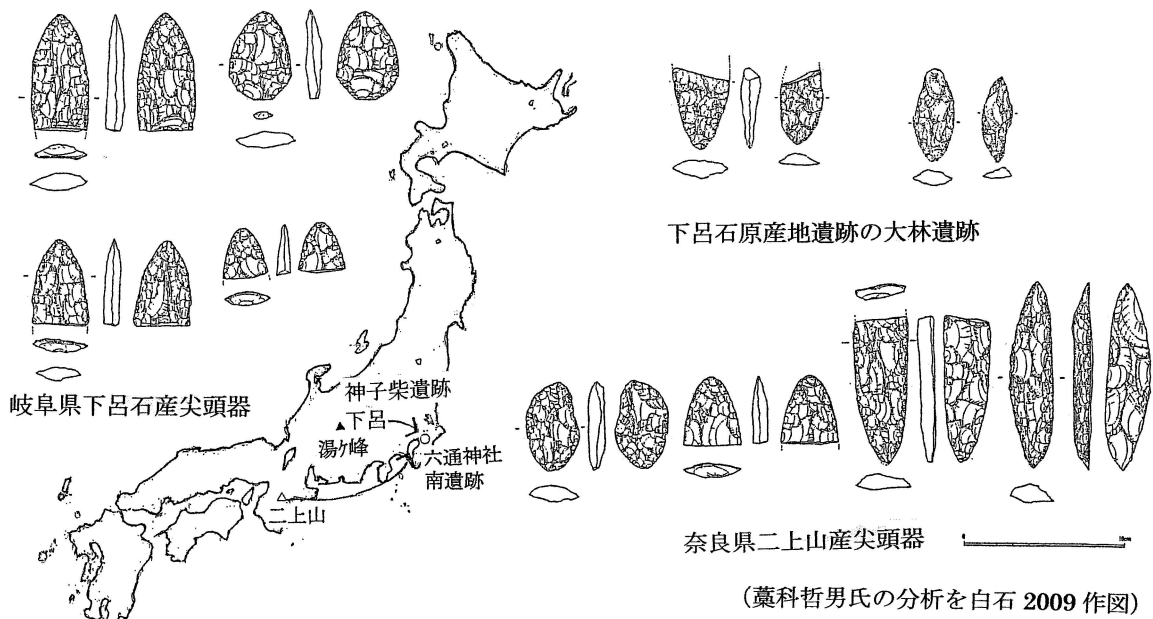
第2図旧石器時代とその区分 (白石 2009 作図)

	ナイフ状石器 柳葉形二側縁 加工ナイフ形石器	切出形二側縁 加工ナイフ形石器	角錐状石器	木葉形尖頭器 槓状剥離尖頭器	周辺加工尖頭器	細石刃	石 鏃 有舌尖頭器
FB 約 1.5 万 年前							
L1S 約 1.6 万 年前							
B0 約 1.7 万 年前							
L1H 約 1.8 万 年前							
B1U 約 1.9 万 年前							
B1L 約 2.0 万 年前							
L2 約 2.2 万 年前							
B2U 約 2.3 万 年前							

第3図尖頭具の種類とその変化 (白石 2009 作図)

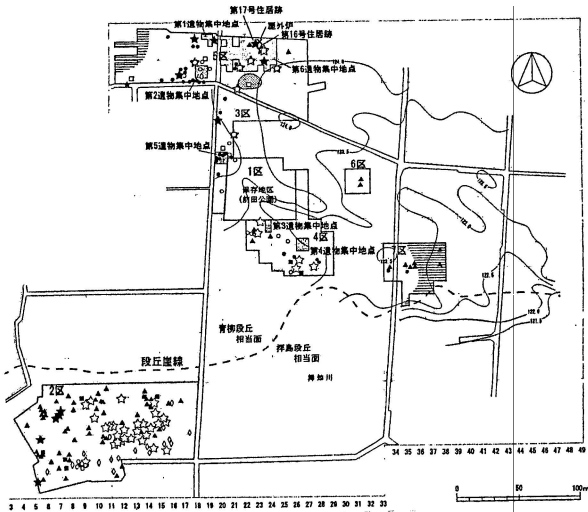


第4図神奈川県田名向原遺跡No.4 地点の遺構と遺物 (戸田・麻生 2003)



(藁科哲男氏の分析を白石 2009 作図)

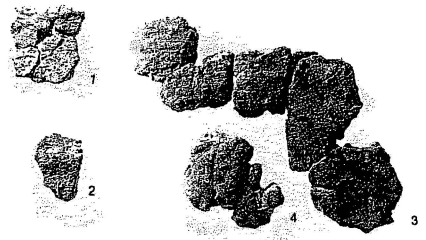
第5図千葉県六通神社南遺跡出土の石材産地



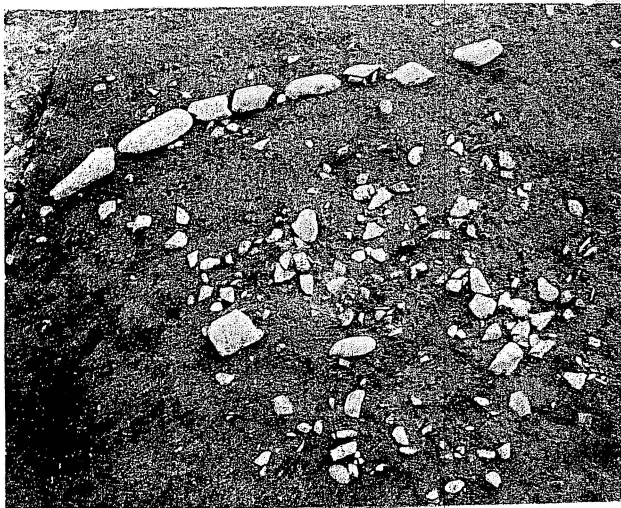
1 前田耕地遺跡の地形図



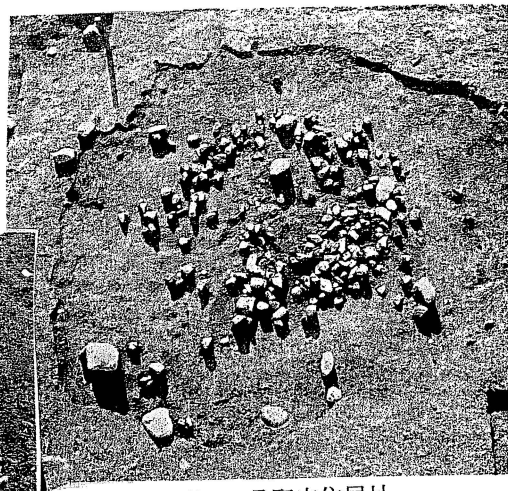
2 出土したサケの顎歯



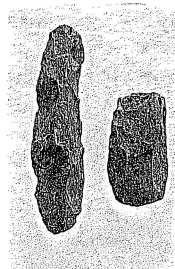
3 出土土器



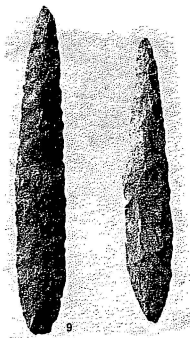
4 川原石を配した第16号住居址



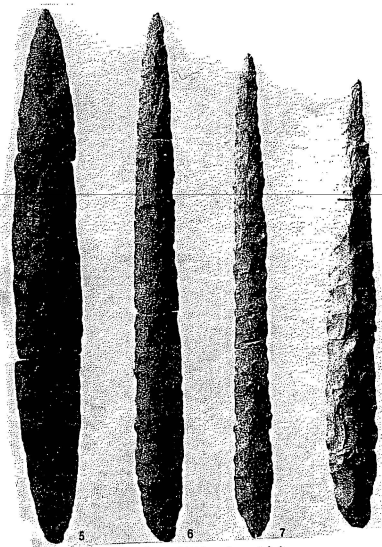
5 第17号竪穴住居址



6 石斧



9



7 尖頭器 (石槍)

第6図 東京都あきる野市前田耕地遺跡の検出遺構と出土遺物